

バスクにおけるルソーの友人たち

—啓蒙主義の実践—

渡部哲郎

バスクにおけるルソーの友人たち

—啓蒙主義の實踐—

渡部哲郎

目次

はじめに

一 ルソー「啓蒙思想」とバスクの友人

二 啓蒙主義の實踐

三 「バスク一体化」の意味するもの

おわりに

はじめに

一八世紀開始とともにスペインはハプスブルク朝からブルボン朝に代わり、本家フランスで盛んな啓蒙主義が本格的に流入することになった。この思想はスペインの根幹にあったカトリック精神を覆すものと受け取られる一方で、この新しい活力に協力し古い停滞した土壌を刷新する穏健な動きも見られた。もちろん、伝統を墨守する保守勢力は前王朝以来の宗教裁判所が行う異端審問によって外来思想を排除することで力を温存していた。

ブルボンの王たちはフランスから、そしてナポリ王から転じて即位したカルロス三世の治世からはイタリアから閣僚を伴い、新しい統治様式と考えを持ち込むことで古い体質の変革をめぐって衝突が繰り返えされた。特に教育や文化機関を支配し、社会的にも大きな力を振るっていたイエズス会は結果的に一七六七年からカルロス三世の裁定によりスペインやそのアメリカ植民地から追放されることになった。

このような情勢下で古い社会基盤に立脚したバスク人たちは伝統に忠実な頑迷な側面を持つ一方で、一六世紀大航海時代に見られてように外の世界へ飛び出し活躍、外の世界とは「ひと」、「もの」を通じて常に接してきた。またバスクの立地条件からもピレネー山脈を挟んだ強国の緩衝地帯にあったことから、独自の自主的な判断、つまり自由に活動できる利点があった。バスク内部は共通の言語であるバスク語によって暗黙的に求心的な結束がある。地域外の人々が難解とされたバスク語を理解してその中に入るとは難しいが、バスク人がフランス語やカステイリヤ（＝スペイン）語を学習して外に出るのは容易だった、という話に例えてバスク社会の頑迷さと従順さが説明される。その居住地域も人口数も小規模であったことからその歴史上に果たした役割は軽視されが

ちであるが、本論で取り上げる啓蒙思想の受容においてもバスクの重要度は看過できない一点である。その受容が思想的な側面はともかく、その思想が内包する実践において他の地域のモデルになるほどに重要なものであった。^{注1}

本論はバスクにおける啓蒙思想の受容、実践の内容を紹介しながら近代直前、つまりフランス革命直前の、以後に優先される国家の枠にこだわらない時期の人々の交流と一地域が独自の発想を展開し活躍した史実を明らかにする。

一 ルソー「啓蒙思想」とバスクの友人

マヌエル・イグナシオ・デ・アルトゥーナ・イ・ポルトウ (Manuel Ignacio de Aluna y Portu 一七二二—一七六

二) の名は後述するバスクの啓蒙主義者ほどには業績も経歴もあまり知られて来なかった。啓蒙思想家として著名で近代社会の形成に結びつくフランス革命(一七八九年)に直接影響を与えたジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 一七一二—一七七八) が著作『告白論』(一七七〇年刊)の中で「ビスカヤの友人」「イグナシオ・エマヌエル・デ・アルトゥーナ」と紹介するアルトゥーナは、ルソーの友人として言及されることが多々あるにもかかわらずである。^{注2} 二人は一七四三年にヴェネツィアで知り合い、翌四四年ルソーの助言でアルトゥーナがパリに移ると、二人は時に同宿して四六年一月アルトゥーナが故郷に帰国するまで話し明かした。その帰国を前にアルトゥーナはギブスコアスコイティア (Azcoitia) 町長への就任を受諾し、その後彼はルソーとの議論や外地での見聞を生かして「バスクの近代化」に着手した。友人ルソーの来訪を待ちながら、それが叶

わぬと、書簡や送られてくる書物を手立てに計画を進めたのである。

このアルトゥーナの存在は彼の早死によって断片的に知られていたものの、バスク地方の人名録や伝記には彼に関する詳細な記述がない。バスク大学のハビエル・パラシオが近年彼の足跡をたどり、その空白を補った論文を著した。^{注3}この論文を助けに彼の業績を追うことにする。バスクにおける啓蒙思想の受け入れはその後に登場する「バスク友好協会 La Real Sociedad Bascongada de Amigos del País」の事例が特筆され、その創立者たちの足跡は詳しく紹介されている。^{注4}しかし地ならしの部分とも言える、成果として「バスク友好協会」の創設に結びつくアスコイティアの町で始まった「文化サロン (テルトゥリア tertulia)」その他におけるアルトゥーナの活動の全容は未だに定かではない。「バスク友好協会」の創設が一七六四年、その二年前に彼は死去していた。スペインの中心にあるカスティーリヤ地方、つまりスペイン国家においては宗教裁判が制度的に継続し、ルソーの思想が危険思想であり、その著作は禁書であった。この意味からもルソーの友人の業績がバスク以外ではあまり取り上げられず、むしろ封印されて来たことも彼の活動を「謎」のままにした。

アルトゥーナはヨーロッパの科学技術の発展を受け入れ、伝来の習慣を変える新しい道徳を青年たちに向けて計画を進めた。彼は地元の有力者ハビエル・マリア・デ・ムニベ・エ・イディアケス (Xavier María de Munibe e Idiáquez 一七二九—一七八五、ペニャフロリダ Peñaforida 伯爵) やホアキン・マリア・デ・エギア・イ・アギーレ (Joaquín María de Eguía y Aguirre 一七三三—一八〇三、ナロース Narros 侯爵)らと共に「アスコイティアの紳士たち」(Caballeros de Azcoitia) 結成に参加し、この三人が一七四八年「学芸委員会」において定期的に交互に討論することのみを規則として文化サロンは始まった。月曜日には数学、火曜日には自然科学、水曜日には歴史講読、木曜日には音楽演奏会、金曜日には地理、土曜日には現状の諸問題に対する議論、そして日曜日

には音楽と論題が決まっていた。^{注5}

ハビエル・M・デ・ムニベ、つまりペニャフロリダ伯は父親がサンセバステイアンにあった「ギプスコア・カラカス特権会社 La Real Compañía Guipuzcoana de Caracas (貿易・海運会社)」の創立(一七二八年)メンバーの一人であり、その息子はフランスのトゥールーズで学び、四六年に帰国、四九年二〇歳で故郷の町長、五〇年にはギプスコア県議に就任している。エギア・イ・アギーレ、つまりナロース侯も五八年に同県議に就いた。アスコイティアの若い地主と商工業者を中心として集まったのが「紳士たち」であった。バスク地方の慣習からその地に地主など財産を相続または所有する家長が地元の行政に口出しできたことから、アルトゥーナ家も地元の土地所有者であり、後述するように海運会社の株主であった。^{注6} 現在でも中心街の外れに当時の邸宅が残っている。

ルソーは友人を「ビスカヤの友人」と書き残しているが、ビスカヤはアスコイティアがあるギプスコア県(地方)と並ぶバスクの中心となる県(地方)名であり、アスコイティアの町からひと山越した隣の谷から始まる。ペニャフロリダ伯は「バスク友好協会」の活動報告の中でアスコイティアの町に隣接するアスペイティアの住人ニコラス・デ・アルトゥーナ(Nicolas de Altuna)が若死にしたが、アルトゥーナ家の人たち(彼らは、と複数形で表記)が超人的な貢献をしたことを述べている。^{注7} アルトゥーナ家は地元の名士であったことに間違いはない。その名士たちの家は地主であるとともに先のサンセバステイアンやキューバのハバナに誕生する海運会社(「ハバナ会社」La Real Compañía de La Habana)の株主に名を連ね、外の世界を知る立場にあつて子弟をフランスに赴かせて教育した。このことからアルトゥーナの来歴もペニャフロリダ伯で見たような同様な歩みであったことが分かる。^{注8}

ルソーはアルトゥーナと一緒にアスコイティアに赴き、そこに定住する計画を立てていた。しかし、それは実

現しなかった。異端審問によつて禁じられていた思想の撤回が求められたが、アスコイティアの友人たちは彼を守る心積もりで住宅も用意した。政治家たち、つまり政治的には許可を得ていたが、教会がこれを許さなかった。ルソーはすでに禁書の著者リストに名前が挙がっていた。彼は著作『エミール』の中の文章を引用され怠け者、従順の敵、盗人、好色とさえ評されていた。彼の著作を読んだだけで一七六八年には宗教裁判に告発された例もあつた。一七八九年から九四年にかけてバスク地方ではフランス啓蒙思想との関係を理由に告発されたのは二〇人以上あつた。^{注9}一七九九年ドイツの博学者カール・ウィルヘルム・フォン・フンボルト (Karl Wilhelm von Humboldt 一七六七—一八三五) が初めてバスク地方を訪問した時、彼は税関で取り調べを受けたが、『エミール』を手に持っていたために無事通過し無罪であつた、と述べている。^{注10}

アルトゥーナは一七四五年九月二九日から四六年九月二九日までアスコイティアの町長職にあつた。しかし彼はその年の終わりまでまだパリにいたのだが、一七四五年一〇月七日町議会において町長受諾の彼の書簡が朗読され、翌四六年一月五日に町長職の権威を表す杖を受け取り、職に就いた。アルトゥーナとルソーの間の書簡(四八年五月二〇日付)にはルソーが再びアスコイティアへ招待されたことと請求された書籍を送付した旨が記されている。^{注11}アルトゥーナはこの後、一七五六年にギブスコア県議に就任するが、死によつて六二年これら行政機関の役職を辞するまで、ルソーを初め啓蒙思想の理念を実現すべく科学技術の発展へ向けての改革と青年の道徳心向上に努めた。一七五六年県議会は科学技術の情報をもとめる書物の編纂について彼の意見も求めている。また同年ギブスコア県における新しい製鋼技術の利便性研究を委託され、製陶業が貴族の品性にあつた職であると思つたために、その工場についても意見を求められた。錠前や刃物製造工場の建設にも付言した。一七五七年『測量技師に必須の実践幾何学 (Geometría práctica necesaria a los peritos agrimensores)』(フランシスコ・ハビ

エル・エチエベリア Francisco Xavier Echeverría 作) がギプスコア県市町村で編集・頒布することに意見を求められている。^{注12}

一七五八年偽名ドン・アントニオ・コゴジョール (Dn. Antonio Cogollor) 作『可視されるものに対する田舎者の批判と書簡 (Los aldeanos críticos o cartas críticas sobre lo que se verá)』はイエズス会士イスラ神父 (José Francisco de Isla 一七〇三—一七八一) の著作 (『有名な説教師フライ・ヘルンディオ・デ・カンパサスの物語』 Historia del famoso predicador Fray Gerundio de Campazas alias Zotes 一七五八年刊) に批判的に答える形で叙述されている。新しい科学知識が盛り込まれた著作はすぐに「アスコイティアの紳士たち」のものと見抜かれ、その代表ムニベ (ペニャフロリダ伯) が作者と疑われたが、実は同書にルソーの思想を取り入れているところからアルトゥーナ作と考えられている。ニュートンの物理学に始まる一六—一七世紀の科学革命を無視し伝統的なアリストテレス哲学がすべてに優先することを批判したものであった。^{注13} そのイスラ神父の著作もフランスなど外国の哲学書を翻訳、引用し新しい哲学を示したものであったが、従来からの聖職者の言説を嘲笑した罪で宗教裁判所は第二版以後の出版を禁止した。^{注14} アルトゥール作と思われる科学哲学を導入した書は啓蒙思想、特にルソーの哲学を謳ったもので、その精神はルソーが考えたように青少年に啓蒙思想を注入することであり、後に教育面で実践される。

二 啓蒙主義の実践

一七六四年「アスコイティアの紳士たち」は「バスク友好協会 (Real Sociedad Bascongada de Amigos del País)」

を創設した。翌六五年四月八日カルロス三世の閣僚グリマルディ (Grimaldi) はこの協会組織を他地方にも広めようと、王の勅令によって認可し「レアル (real 王立)」の冠を付けることを許した。一七七一年同協会は教育機関「ベルガラ・セミナー (Seminario de Vergara)」を設立し、科学技術と道徳の向上を図った。これは、ルソーの思想を体現しようとするアルトゥーナが町長就任受諾の書簡で意図したことに始まり、彼の青少年育成の考えを具体化するものであった。セミナーの学生たちは実践的な科学を身につけるために数学、哲学、自然科学、法律 (古い法と新しい法)、歴史の科目を学んだ。宗教裁判があるにもかかわらず (一七五九年から読書禁止)、このセミナーは啓蒙思想を盛り込んだ「百科全書」の各巻を揃えていた。もちろん、ベルガラ教区の許可を得ていた。時には宗教裁判所が没収するものの、すぐに返還させている。^{注15}

バスク友好協会会長ペニャフロリダ伯は前述したようにフランスのトゥールーズで勉強し、その知識を故郷アスコイティアに持ち返りたかった。その際にイエズス会士の教師に相談すると、私的な文化サロン (テルトゥリア) を作るように助言を得た。このようにして「アスコイティアの紳士たち」のサロン活動が自宅を開放して始まった。ペニャフロリダ伯は組織運営を統括し、アルトゥーナが理論を指導した。この集まりからバスク友好協会が発足し、バスク地域内のみならず海外にいるバスク人子弟の教育、またスペイン国内外の研究機関の一翼を担うまでに広がることになる。

「アスコイティアの紳士たち」を中核とした協会の創立にあたって、会員にはバスク内外の有力者の名前がある。バスク内では地元ギプスコア県のみならず、ビスカヤとアラバの三県、バスク外ではサラマンカやカデイスの居住者もいた。旧体制を基盤とする農村貴族 (有力地主) や次代を担う進歩的な商工業関係者と新旧両面を兼ね備えているが、社会的には富裕層であった。会員は六段階に区分された。一・ナンバー会員 (バスク三県各八名で

総数二四名)、二. 名誉会員、三. 功勞会員(二と三の会員はバスク県外の人)、四. ナンバー外会員(上記二四名以外の人)、五. 準会員(学識、科学的能力によって選出)、六. 学生(一八歳以下の若い「紳士」、以上を三県均等に人数を選んだ。会員には研究と学習を義務付け、自然科学(物理)、数学、歴史(聖・俗)、雄弁術、カステイリヤ(スペイン)語の詩、バスク語、音楽の項目を研鑽する。他に農業、芸術、商業の研究と実践を進める会員もいる。テーマ別に専門家が招待され、討論(勉強)会が開催された。^{注16}

参加会員を分類したリストによれば、貴族、科学者、文学者、研究者、教会関係者で構成され、教会関係者では、一七六五―一七七五年に二九名の聖職者がいて、そのうち六名が司教、五名が宗教裁判所関係者であった。^{注17}この事実から旧来の宗教界との隔絶とは言い難く、むしろ融和・協調的な面もあることが指摘できる。伝統的に宗教が生活の中に入り込んでいるバスク社会では理念だけでは通りにくい実情があったのであろうか。それでも宗教には用心していたものの、禁書を読んだ罪で告発された例がある。協会創立者の一人であるナロース侯爵も告訴される事件も起こった。^{注18}

ブルボン朝になってから従来のイエズス会を中心とした学問・教育指導が停滞していると判断され、新しい学問、特に科学的な志向が求められていた。マドリードでは政治が先行し、社会的に影響力も保持していたイエズス会との対決が打ち出されたが、周辺のバスク地方では聖職者も参加する「改革」へ向かっているように中央と地方ではいわゆる改革への温度差もある。バスクの有力者の子弟はイエズス会の教育機関に通い、フランスへも学びに出かけ、成長過程で新旧の思想的な流れが自然に入り込んでいた。イエズス会が王の勅令によってスペインとその植民地から追放されてからはその施設が新しい学校に利用され、協会が運営する研究機関も同様に旧イエズス会施設に設置された。この施設利用は教育が教会から離れる契機にもなり、その教育内容は思想重視より

も実践的な教育への移行が加速する。バスクの「改革」は実践においてその力量を發揮し始めた。年少者用の文科学校がバスク地方内のビトリア、ロヨラ、ベルガラ、サンセバステイアン、ビルバオに登場し、カステイリヤ語やバスク語の初級言語（基礎）の学習の他に習字、作文、算数、デッサン（図工）の「実用」を教えた。このような学習熱はアメリカやフィリピンの植民地からの入学者を受け入れるほどに広がった。^{注19}

なかでもベルガラ・セミナーはヨーロッパ最先端の科学知識が持ち込まれ、その研究機関では化学実験が行われ、各種の発見に成功した。今のドイツ・ザクセンで鉱山学を研究し一流の科学者となっていた、ログローニョ生まれのファウスト・エルヤル・イ・デ・スビスサ (Fausto Elhuyar y de Suvisa) はベルガラ・セミナーに招聘され、その兄弟ファン・ホセ (Juan José) と共にタングステンの分離・抽出に成功した。その後、彼はメキシコに派遣され、銀の新しい分別法を發明している。^{注20}ベルガラ・セミナーにおける実験は鉄鉱物の産地であるバスクの製鋼業を初めヨーロッパの技術に大いに役立ったことは言うまでもない。

バスク友好協会には多くの海外居住バスク人が参加し、経済的に貢献した。アメリカ在住会員からの送金の重要性が一七七七年同協会「バスク評議会」で取り上げられた。一七七四〜九〇年の間に送金量が一五〇万レアル（銀貨。当時、1レアル＝1、六九¢）に達し、一七九二年会員登録一一八一名の内、アメリカ四九六名、バスク以外のイベリア半島二八七名、バスク内二二一名である。友好協会がバスク移民からの海外送金の受け取り機関となっていたこともあるが、移民子弟の教育機関としての役割も担っていた。「バスク愛国セミナー」、「ビスカヤ貴族セミナー」において彼ら子弟はヨーロッパの新しい空気を学んだ。その中からアメリカ植民地「独立の父」シモン・ボリーバル (Simón Bolívar 一七八三—一八三〇) が登場するのである。改革・実践主義の教育は空論ではなかった。^{注21}

二 「バスク一体化」の意味するもの

「バスク友好協会」会則の第一章に、「この会の目的は）バスク国民 (Nación Bascongada) の志向を科学、芸術、文学の方へ育成すること。彼らの習慣を正し、洗練する。怠惰、無知、その害悪な結果を捨て、アラバ、ビスカヤ、ギプスコアのバスク三県の結束を一層固める」とある。^{注22}この目的が示すように、すべての再生計画が教育と科学の普及により進み、啓蒙主義の特色である理性の勝利を信じる楽観主義が根底にある。この目的に沿った具体的な実践は前述してきた。ここで注目したいのは後段にあるバスクの一体化である。一七六五年に制定された協会の紋章は三つの手が真ん中で組み、その上にバスク語で「三つが一つになる (IRVRAC BAT)」の文字が印されたりボンが懸けられている。^{注23}一つのバスク社会の誕生がこの紋章には込められていた。その社会は単なる地域的なまとまりだけでなく、同じ知識で包括される、領域的な範囲を超える、新しい時代の広がりでもある。この協会のセミナーで教えたり、教育を受けたものはヨーロッパはもとより、アメリカ大陸へも広がって行った。この兆候はルソー的な自由な社会が意味する普遍性を体現するものではなからうか。単なる領域的な国民 (ナション・ネーション) 形成を意図するのみではなかったのである。

しかし、フランス革命、さらに国家間の国境をめぐる対立、つまり国益をそれぞれが追求して引き起こされる戦争がその広がり限定してしまうことになる。バスクもバスク国民として一つに包括する方向性が唱えられながらも余りにも故地が小さ過ぎて、広がり世界規模に展開しても人的には少数過ぎた。それゆえに周辺の強国の勢いに飲み込まれてしまい、啓蒙主義の実践で得た広がりもその内に吸収されてバスクの故地は伝統的な独自性のみが際立って残った一地方になってしまうのである。

スペイン国内ではカルロス三世政府が目指す経済の再編に「バスクモデル」が利用され、バスク友好協会と同種の組織は全国に広がり各地に五九の経済団体 (Sociedad Económica 商工会議所) が誕生した。^{注24}そして同協会が設置したベルガラ・セミナーなどで教育・実験された科学知識で育った人々がスペイン国内外へ派遣された。前述のタンゲステンの発見はヨーロッパやアメリカ植民地の製鋼技術に貢献し、芸術にける実践的な部門もデザイン学校の設立などに結実した。新しい思想や学問の受容が新しい社会の形成に多少なりとも貢献した。これらの新しい事象の出発が国家と国家の争いの中で「国」を持たなかった地域で見られからと言って看過すべきではない。バスクという国家は存在しないが、国の枠を越えた範疇で「啓蒙思想」を受容して展開した事実は残る。近代以降の歴史の流れの中でそれほど特筆する功績を残さなかった、「失敗した啓蒙主義改革」の国スペインであったと一般に受け取られるが、しかしバスクの例を見れば「(スペインの)一八世紀をこれまで否定的に取り扱ってきたのは根拠が薄い」^{注25}ことにもなる。バスク地方に限って見れば、その内部に取り込まれた組織や知識は一九世紀末にスペインで唯一見られた重工業(製鉄)を中心とした産業革命の成功につながり、バスク・ナシヨナリズムの萌芽や現代における技術刷新へ導く伏流となつて行くのである。

おわりに

バスクの独自性を追求する姿勢はバスク友好協会の会則第一条にあるように三県の一体化と小「国」(ネイション)の形成を示唆しながらも、実際には啓蒙主義の実践を進める過程でその思想が内包する普遍性の中に一般化して薄れてしまった。しかし、その固有な言語は普遍性の流れに乗り切らないバスク内だけのものだった。言

語の固有性とこの言語による一体感の認知は後に地方ナショナリズム勃興の際に生きた。また近代においてもバスクはカトリック思想が強固に根付いていたことが自由主義の中央集権に反対する立場に身を置くことになった。例えば、一九世紀三〇年代のカリスタ戦争の事例がこれに当る。^{注26} スペインではブルボン王朝による主導権の下に実行された「上からの改革」、つまり国家統合が進む過程で、同じカトリック勢力でありながらも政治・社会的な主導権争いで敵対したイエズス会を追放することで他のカトリック勢力を味方に付けて改革が推進されたが、フランス革命の勃発で改革は頓挫した。他方、バスクの啓蒙主義改革は理念に忠実であったが、^{注27} 理論通りの反教会、反カトリックの立場に固執することなく、「実践」に「教育」に重きが置かれたのである。

最新の科学的な思考を導入し伝統的な思想や生き方を再考することが「バスク近代化」を導くという考えがアルトゥーナ初めバスク啓蒙主義者にはあったが、そこから従来の権力構造を交換してしまうことまでは意図しなかった。地主として古い基盤にも立脚したバスクの支配層にとって改革は新しい流れに即した生き方、つまり実践を、そして次世代に教育を促すことによる延命策であったと考えることができる。バスクの支配層が伝統を保持しながら新しさを求める行動様式は各時代にも見られ、少数者であるがゆえに時代を生き抜く「知恵」として身に付いたものであった。伝統を生かしながら内部結束を維持し、外に目を向ける開放性が独自の社会形成を常に更新して行くのである。新しさを加えながら、古いものを変えない、これがバスクの本流にある。本論で扱った新しい「啓蒙思想」もバスクの本体強化に役立った事例と言っても良い。

(本研究にあたって平成14年度横浜商科大学学術研究会の研究助成を受けた。)

注

注1 バスク概論については、渡部哲郎『バスクとバスク人』（平凡社新書 二〇〇四年）参照

注2 「私はヴェネチアで、あるビスカヤ地方（スペイン）の男と知り合った。」「イグナシオ・エマヌエル・デ・アルトゥナは、スペインだけが生みだす、あの珍しい人物の一人であるが、しかしスペインがその栄光のために生みだすことが、きわめて少ない人である。」「彼は気質とともに、肌の色もスペイン人らしくなかった。」「この心も頭も賢い男は、人間というものをよく知り、私の友だった。」「われわれは非常に固く結ばれたので、いっしょに暮らそうという計画を立てた。私は数年後には、アスコシア（筆者注：アスコイティア）へ行つて、彼の領地でいっしょに暮らすはずになっていた。」（下線は筆者による）以上、『告白』7巻（『ルソー全集』第1巻 小林善彦訳 白水社 一九七九年）pp.355-357

注3 Palacio, Xabier:Recepción de ilustración en la cultura vasca, en el proyecto de Investigación Jean-Jacques Rousseau y la modernidad del País Vasco, 1997.

注4 バスク百科事典叢書の人物編、López Sainz,Celia:100 vascos de proyección universal, Editorial La Gran Enciclopedia Vasca, 1977. においては、寓話作家サマニエゴ（Feliz María Samaniego 一七四五—一八〇二）はバスク友好協会（La Real Sociedad Bascongada de Amigos del País）のホームペーシ（<http://www.bascongada.org>）では、ペニャフロリダ伯とナロース侯の人物紹介がある。バスク啓蒙主義者の分類によれば、プレ啓蒙主義者（伝統的な産業・農業の対局にある商工業の発展を目指す）、経済家（エコノミスト）、理念に忠実な古典的な啓蒙主義者（バスク友好協会のメンバー）、プレ自由主義者がある。

Estévez, José:La Ilustración en Historia del País Vasco (Siglo XVIII), Universidad de Deusto, Bilbao, 1985, p.75

注5 Palacio 前掲書 p.2

注6 Gárate Ojanguren, Montserrat y Blanco Mozo, Juan Luis:Martín de Aróstegui (1698-1756), Revista Hispano Cubana, num. 2, 1998, p.75.

注7 Munibe Idiaguez,Francisco Xavier María de:Historia de la Real Sociedad Bascongada de los Amigos del País, Eusko

- Ikaskuntza, 1931. p.460
- 注8 Gárate Ojanguren 前掲書 p.75
- 注9 Palacio 前掲書 p.3
- 注10 Palacio 前掲書 p.4
- 注11 Palacio 前掲書 p.4
- 注12 Palacio 前掲書 p.5
- 注13 Palacio 前掲書 pp.5-6
- 注14 ウィリアム・バンガード著 上智大学中世思想研究所監修『イエズス会の歴史』(原書房 二〇〇四年) pp.357-358
Palacio 前掲書 p.6
- 注15 Palacio 前掲書 p.8
- 注16 García de Cortázar, Fernando y Montero, Manuel: Diccionario de historia del País Vasco Vol.2. p.274.
- 注17 García de Cortázar 前掲書 p.276. ホセ・エステベスによれば、一七七八年の会員構成は、以下の通りである。
国家役人(二〇・九%)、軍人(一〇%)、貴族(七・七%)、聖職者(六・四%)、その他(六四%)。会員数は、一七六八年(五七名)、一七七三年(五〇〇名)、一七七八年(九〇〇名)、一七八八年(一三〇〇名)。
一七七三年新会員の内、最大数一七一名がヌエバ・エスパリーニャ副王領(メキシコ)のメキシコ市、三〇名がプエブラ・デ・ロス・アンヘレス、五名以上が七つのビジャ・アステカの町々、二七名がキューバのラ・ハバナ。国内の会員数では、マドリードが一〇九名、セビーリヤが四〇名、カディスが四〇名。バスク友好協会の会員がバスク内のみならず、スペイン国内、海外に広がっていることが分かる。Estevez 前掲書 p.81
- 注18 García de Cortázar 前掲書 p.276
- 注19 García de Cortázar 前掲書 p.276 「注17」の海外会員数の増加、参照。
- 注20 ベルガラ・セミナーについては、Silván, Leandro: La Real Sociedad Bascongada de Amigos del País y el Real Seminario Patriótico Bascongado de Vergara, en Historia del País Vasco (Siglo XVIII), Universidad de Deusto, Bilbao, 1985. pp.184-188.

- 注21 Azcona, J.Manuel:La participación vasca en la empresa colonial y emigratoria americana, en Historia general de la emigración española a Iberoamérica, Vol 2, Madrid, 1992. p.474. 渡部哲郎 前掲書 pp.93-95
- 注22 Estévez 前掲書 p.81
- 注23 iñurac bat が二つが一つの意味。uがvと表記されているが、同じ。
- 注24 Estévez 前掲書 p.63 一九世紀初めまでは、六八団体。渡部哲郎 前掲書 p.94
- 注25 フアン・ソペーニャ『スペインを解く鍵』（平凡社 一九八六年）p.152
- 注26 カルリスタ戦争については、渡部哲郎 前掲書 pp.108-112.
- 注27 注4、エステベスによるバスク啓蒙主義者の分類によれば、バスク友好協会のメンバーは理念に忠実な古典的な範疇に入る。